NPO
中帰連平和記念館
CHUKIREN HEIWAKINENKAN

記念館設立 10 周年集会 開催

記念館は昨年 11 月で NPO 認定・設立 10 年を迎え、ちょうど「戦犯裁判・帰国 60 年」にも当たり、11 月 13 日に地元川越の「ウェスタ川越」で『NPO 中帰連平和記念館 10 周年集会』を開催（共催：「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」、季刊『中帰連』）しました。当日は準備した 160 席では足りず、予備の椅子まで使い 200 人余りの参加者で会場が埋まりました。

当日は首都圏の他、北は北海道や山形、南は沖縄や熊本などからもご参加下さいました。またシドニー大学のクレアモント康子博士はこの集会参加のため、ご主人同伴でオーストラリアから駆け付け、会員登録もして下さいました。

集会は最初に芹沢事務局長の「記念館 10 年の歩み」の報告後、元中帰連・上坪鉄一氏のご遺族の伊東秀子さん（元衆議院議員・弁護士）の『戦犯だった父の遺言』と題した講演をして頂きました。伊東さんは憲兵隊長だった父・上坪鉄一氏が当時マルタ（丸太）と称した中国人 22 人を自ら 731 部隊に送った事を知り、昨年夏に勇気を出して『父の遺言』（花伝社）を書いた苦しみなどを語り、多くの人が理解してくれ「書いて良かった」と語りました。

続いて記念館の「名誉顧問」をお引き受け下さっていたむのたけじさん（昨年 8 月逝去、享年 101 歳）のご子息・武野大策さん（医学博士）に『101 歳のジャーナリスト･父むのたけじからのメッセージ』と題して講演頂きました。

休憩を挟み松村髙夫理事長の司会で『負の連鎖を絶ち切るために』をテーマにしたシンポジウムに移り、パネラーには大西広さん（慶応大学教授）、遠藤美幸さん（神田外語大学非常勤講師）、張宏波さん（明治学院大学教授）、今井雅巳さん（当記念館副理事長・高校教師）、細川清和さん（当記念館理事・建築家）、石田隆至さん（当記念館理事・大連理工大学教員）の皆さんが参加し会場からも活発な発言もあり好評でした。

目　　次

・「記念館 10 周年集会」開催 ･････････ 1
・「むのたけじさんを偲ぶ会」 ･････････ 2
・瀋陽「戦犯帰国 60 年シンポ」参加････ 2
・「戦争遺跡保存全国ネット集会」 ･･････ 3
・「平和博物館ネット全国交流会」 ･･････ 3
・「東京新聞・記念館報道」 ･････････ 4
・連載「記念館資料室から」 ･････････ 4
・「東アジア近現代史研来館」 ･････････ 5
・「季刊・中帰連 60 号発行」 ･････････ 5
・「ご寄贈の本から」 ･･････････････ 6
・「記念館 リーフレット完成」 ････････ 6
・「振込用紙同封」について ･････････6

最後に姫田光義理事の閉会挨拶で幕を閉じました。

ここに 10 年を迎えられたことはご理解ご支援下さった多くの皆様のお陰であり、記念館は一切の「公的補助」を受けておらず、皆様のご支援だけで運営させて頂いており、改めて心より御礼と感謝申し上げます。

私たちはこれからも「中帰連」の皆さんの思いを裏切らないように、過去の「歴史の事実」をシッカリ後世に伝える努力を続けます。今後ともご支援の程宜しくお願い致します。

大隈講堂で「むのたけじさんを偲ぶ会」

記念館の名誉顧問をお引き受け下さっていた『むのたけじさんを偲ぶ会』が、「早稲田大学大学院政治学科ジャーナリズムコース」と、「むのたけじさんを偲ぶ会」の共催で 9 月 24 日に早稲田大学・大隈講堂で開かれ約 700 人が参加しました。当日は生憎の小雨のなか 18 時の開場前から、むのさんを惜しむ皆さんが会場前に駆けつけ整理券が配られ、記念館からも数名がお手伝いさせて頂きました。

第一部の「シンポジウム」には「鎌田慧、桂敬一、佐高信、宮城修、落合恵子」の 5 氏が参加、第二部「むのさんと出会って」には各紙の記者など 7 名が、第三部の「むのさんの魂を継承する」では 3 名が発言し、当記念館の松村高夫理事長（慶応大学名誉教授）もむのさんと記念館の関係や、むのさんへの思いを話しました。最後にご子息の武野大策さんがご遺族を代表し挨拶され 21 時前に終了しました。改めてむのさんへの感謝と共にご冥福をお祈り申しあげます。

シンポジウム『歴史の証明』（於 瀋陽）報告

松村高夫（代表理事）

2016 年 8 月 28 日、中国の瀋陽で開かれた「日本戦犯釈放 60 周年記念シンポジウム」について報告しておきたい。主催は中国友誼促進会　後援は撫順戦犯管理所陳列館であった。中国側特別ゲストは馬燐栄中国友誼促進会理事ほか 2 名、日本側特別ゲストは近藤昭一衆議院議員他 1 名であり、中国側代表１５人、日本側代表は 16 人であった。昨年の北京での中国友誼促進会主催の会議が 2 日間おこなわれ、討論のテーマも日中関係にかんする広いテーマであったのに対し、今年は会議は 1 日で、報告も中帰連を軸とするテーマに絞られていた。日本側代表のうち、中帰連平和記念館の関係者は、荒川美智代、石田隆至、兒嶋俊郎俊郎、張宏波、姫田光義、松村高夫であり、平山百子が傍聴した（以下も敬称を略す）。

28 日午前中に行われた第 1 セッションのテーマは、「中国の対日戦犯寛大政策の実施とその意義」であり、日本側の発表者は大澤武司が「なぜ私が『撫順の奇蹟』を研究するのか」、伊東秀子（元中帰連・上坪鉄一の遺族・元衆議院議院・弁護士）が「父の遺言ー戦争が人間を狂気にする」、姫田光義が「戦犯裁判・戦犯帰国 60 周年」にあたり、『撫順の奇蹟』を世界歴史記憶遺産に」、松村高夫が「中帰連平和記念館の為していることと為すべきこと」というテーマで報告した。

午後の第 2 セッションのテーマは、「歴史を鏡とし中日両国が世々代々友好を深めていこう」であり、日本側の発表者は田中義教（日中友好協会理事長）が「『撫順の奇蹟』の日

中友好運動における今日的意義について」、矢崎光晴（元中帰連メンバー矢崎新二の子息、日中友好協会事務局長）が「中帰連の二世として考える反戦平和と日中友好」、石田隆至が「日本戦犯の経験をとらえる文脈の探求：『洗脳』『礼賛』『外交カード』のその先へ」、荒川美智代が「『中帰連』の証言をどう残し、後世に伝えていくか」というテーマで報告した。午前も午後も報告の後の討論の時間がなかったのは、各報告が重要な問題を提起していただけに、極めて残念だった。

翌日、シンポジウムの日本側代表は平頂山虐殺の記念館を見学し、さらに撫順戦犯管理所跡を見学し、その後「再生の大地合唱団」の熱演を観賞した。今回の 2 日間の日程が、主催の中国友誼促進会と後援の撫順戦犯管理所陳列館の献身的努力により、成功裡に終わったことは特筆しておきたいし、両団体には心からの感謝を申しあげたい。だが、日本側の問題としてはシンポジウムと合唱が統一的になされなかったことを指摘しておきたい。この点は今後のために十分考慮する必要があろう。

「戦争遺跡保存全国ネット」参加

今年で 20 回目を迎えた『戦争遺跡保存全国ネットワーク』のシンポジウムが 8 月 20 ～ 22 に、第 1 回が開かれた「松代大本営」の在った長野県「松代文化ホール」などで開催され約 150 人が参加しました。

初日の 20 日午後からの全体集会では主催者挨拶の後、朗読劇『女たちのマツシロ 2016』（NPO 松代大本営平和祈念館）や、地元童話作家の和田登さんの記念講演の他、基調報告、地域報告がありました。その後の総会で決算が承認され、次回の第 21 回大会は「高知」で開催されることに決まりました。

翌 21 日は「保存運動の現状と課題」、「調査の方法と整備技術」、「平和博物館と次世代への継承」の 3 つの分科会に分かれて開かれ、芹沢事務局長が第三分会で『NPO 中帰連平和記念館近況報告』と題して、中帰連と記念館の経緯と近況をプロジェクターで写真を提示しながら約 40 分発表しました。各分科会からはそれぞれ 6 人の発表ありました。

21 日の「閉会集会」では各分科会から経過報告があり、その後、大会アピールと熊本地震での文化財修復保存を求める「特別決議」が採択されました。最終日 23 日は「幻の大本営」の見学がありました。地元「松本大本営の保存をすすめる会」の皆様に大変お世話になり感謝申しあげます。

アウシュビッツ平和資料館で「平和博物館ネット」全国交流会

毎年開催している『平和のための博物館・市民ネットワーク』 の全国交流会が今年は 11 月 29、30 日の両日、福島県白河市の「アウシュビッツ平和博物館」（会場は隣の「原発災害情報センター」）で開催されました。

参加者は遠く沖縄の「ひめゆり平和祈念資料館」や、「ナガサキピースミュージアム」などから、地元アウシュビッツの関係者を含め 70 名が参加、「中帰連平和記念館」からも松村理事長と理事ら 7 人が参加しました。

初日冒頭に放射能測定を継続している「福島プロジェクト」の安斎育郎さん（立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長）が状況を報告、続いて国際平和博物館会議（INMP）の理事である山根和代さんからは、INMP の会費の困窮状況や今年 4 月予定の「ベルファスト会議」などについて報告がありました。

その後、は君塚仁彦さん（東京学芸大学教授）の「<歴史を逆なでする>博物館のこれまでとこれから」と題した特別報告があり、続いて、栗山研究さん（法政大学非常勤講師）と萩原達也さん（東京大学大学院教育学研究科）からは「アウシュビッツ平和博物館の実践と軌跡」と題した二つ目の特別報告がありました。

その後、休憩を兼ねて「アウシュビッツ平和博物館」の見学の後、一般報告（発表）に移り、「中帰連平和記念館」からは松村理事長が昨年と今年の中国での「日中関係シンポジウム」の報告を、芹沢事務局長が中帰連と記念館の近況報告をしました。他に両日で８団体からの発表がありました。17 時からは同会場で「懇親会」が開かれ、各地の参加者との親睦が図られました。

二日目は前日の報告と交流の続きとなり、その後、次回開催地を京都の「立命館」と会計報告が承認され正午過ぎ終了しました。

尚、現地には「３・１１」の原発放射能で汚染された畜産農家の男性が『原発さえなければ』などと書き遺したベニヤの「原板」がに大切に保管（非公開）され、多くの参加者が原発事故への思いを新たにしました。

東京新聞が「記念館10周年」を紹介

本紙一面の通り 11 月 13 日『10 周年集会』を開催しましたが、当日の集会や記念館にも来館取材した『東京新聞』の佐藤大記者が、12 月 18 日付けの『東京新聞』特報面で、「中帰連平和記念館」の紹介記事を書いてくれました。

記事は「中帰連」の思いを受け継いだ「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」発足、初代の仁木ふみ子理事長や、記念館の経緯なども載せてくれました。

2016年(平成28年)12月18日(日曜日)　28

報部　FAX 03(3595)6911　E-Mail tokyoshinbun@tokyo.co.jp

中帰連平和記念館 10周年

語り継ぐ 加害の歴史

中国人虐殺 元戦犯者の手記など5万点

早速、「東京新聞で見た」と掲載当日に見学者が来館し、その後もメールや電話での問い合わせや来館希望、入会希望の問い合わせがあり、嬉しい現象が続いており、佐藤記者も反響を喜んでいます。（東京新聞 12/18）

中国・江蘇省ＴＶ局　来館

昨年 11 月 13 日の『記念館 10 周年集会』の取材に来日した中国の江蘇省ＴＶ局が、12 月 9 日に記念館の取材に、通訳を含めカメラマンなど 5 人が来館しました。

当日は松村髙夫理事長や武野大策さんのインタビュー、記念館内や資料などの取材・撮影をしました。芹沢事務局長と司書の宮本直子さんも立ち会いました。

（松村理事長、武野大策さん、ＴＶ局）

連載　記念館資料室から

第10回　中帰連会報『前へ前へ』に学ぶ

石田隆至（「中帰連に学ぶ会」事務局）

これまでは戦犯の創作「手記」を御紹介してきましたが、今後は中帰連の会報だった『前へ前へ』を取り上げていきます。今回はその概要とねらいを簡潔にお話します。

『前へ前へ』の創刊第 1 号は 1957 年 1 月 30 日、つまり帰国して約半年後の時点で、同年

秋に正式に中帰連が結成されるよりかなり前の段階に発行されました。以降、1967 年 2 月の組織分裂まで、44 号を数えます。二つの組織に分かれた後は、「中帰連（正統）」が再建 1 号から 64 号まで、「中帰連（中連）」が 45 号から 74 号まで発行します。1986 年 10 月の組織統一後は会報も一本化し、統一第 1 号から組織解散に至る 60 号まで発行されました。合計すると 45 年あまりの歴史のなかで約 200 回発行されたことになります。

このうち、大半の号が中帰連会員と記念館事務局の皆さんの努力で保管されています。芹沢事務局長を中心にデジタル保存の作業も進んでいます。

会報に目を通していますと、帰国直後の理想と苦悩、分裂期の苦難、統一後の活性化などが活き活きと伝わってきます。1996 年に刊行された中帰連 40 年史（『帰ってきた戦犯たちの後半生』新風書房刊）は、この会報がベースになって整理・編集されています。ただ、90 年代の観点から編集されていますので、草創期のみずみずしい息吹や「理想の時代」の使命感、活動低迷期の試行錯誤や混乱などは、直接会報を見ることで一層リアルに伝わってきます。

特に、50 年代後半から 70 年代初めくらいまでの初期から中期の会報を見ていますと、現在の日本社会全体で「総右傾化」が進んでいることを実感させられます。中国を「脅威」としてしか見ることができず、日本人戦犯を寛大に待遇し、戦争時の過ちを見つめ直し人間性を回復させる人道的教育を「洗脳」や「外交カード」とみなすのは、決して「客観的」でも「中立的」でもないことを中帰連の人々は身を以て訴えていました。いま、『前へ前へ』に学ぶ意義はその観点を活かすことにあると考え、次回から一号ずつ紹介していきたいと思います。

「東アジア近現代史研」の皆様来館

東京・練馬で毎月『アジア近現代史セミナー』を開催している皆さんが 10 月 15 日に来館しました。普段から勉強会で事前学習されている方々でした。

最初に皆さんからのご要望で『戦犯たちの告白』（45 分）を視て頂いた後、芹沢事務局長が「中帰連」の他に記念館の経緯や現状などを説明しました。

（「東アジア近現代史研」の皆さん）

季刊『中帰連』60号発行

季刊『中帰連』は中帰連の加害・虐殺などの証言が「ウソだ、洗脳だ」と右翼からの攻撃の反論として、中帰連（高齢のため 2002 年 4 月解散）が 1997 年に発刊した季刊誌（現在、年 3 回）です。

中帰連は戦後、中国に戦犯として撫順と太原戦犯管理所に収容された元兵士が人道的扱いを受け、6 年の歳月を掛けて認罪し「鬼から人間」に戻った人たちが、帰国翌年の 1957 年に立ち上げた組織です。

その戦犯 1062 名のうち起訴されたのは政府・軍高官の僅か 45 名で，その中には一人の無期も死刑もなかった。それは周恩来が「復讐や制裁では憎しみの連鎖は切れない、20 年後には解る」と死刑や無期もあった判決文を 4 回も書き直しを命じた結果でした。

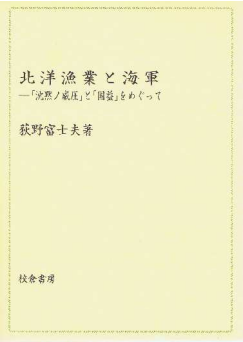
この 60 号の『戦犯裁判・戦犯帰国 60 周年』特集は、当時の撫順戦犯管理所で元戦犯たちの「座談会」の記録など貴重な記事もあり、多くの人に読んで欲しい特集号です。尚、次号 61 号は『記念館特集』です。

（必要な方は事務局まで￥500）

【ご寄贈の本から】

『考えてみませんか
9 条改憲』

著者：久保田貢
出版：新日本出版
発行：16.12.10
定価：1800 円＋税
Ａ５版　211 頁

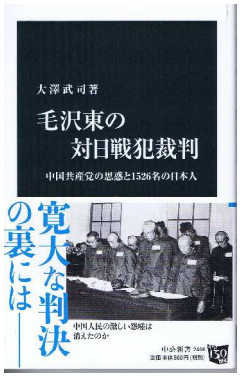


『北洋漁業と海軍』

著者：荻野富士夫
出版：校倉書房
発行：16.2.29
定価：6000 円＋税
Ａ６版　374 頁

『福沢諭吉と丸山眞男』

著者：安川寿之輔
出版：高文研
発行：2016.10.15
定価：3700 円＋税
Ｂ５版　510 頁



『毛沢東の
対日戦犯裁判』

著者：大澤武司
出版：中公新書
発行：1016.11.25
定価：860 円＋税
新書版　260 頁

【訂正とお詫び】

前『会報 16 号』1 面のむのさん逝去の記事で、名誉館長は「名誉顧問」の間違いでお詫びして訂正させて頂きます。

【お　礼】

会員やご来館の皆様から「年賀状」が届き有難うご座居ました。御礼申し上げます。

【記念館「リーフレット」完成】

記念館は昨年 11 月の「設立 10 年周」に合わせ、今まで無かった記念館の「リーフレット」を作成しました。今回「会報」に２部同封させて頂きました。必要な方はご連絡下されば必要部数をお送り致します。

【「振込用紙」同封について】

会報には毎回「振込用紙」を同封させて頂き、既に「会費納入済」の皆様には不本意な方もおありかとお詫び致します。

同封理由は会員の皆様を含め、多くの方から会費以外の「カンパ」のご支援を戴いており、振込用紙同封は「会費請求」ではないことをご理解戴ければ有り難く思います。「会費納入」状況は今回より毎号宛名右下に「〇〇年度迄会費済」と記載させて頂きますので、ご参考にしてくだされば と思います。

記念館は一切の「公的補助」を受けておらず、この 10 年間、皆様のご支援だけで支えられており、心より感謝と御礼申し上げます。今後ともご支援のほど宜しくお願い申し上げます。

『NPO 中帰連平和記念館』

〒 350-1175 埼玉県川越市笠幡 1948-6
TEL&FAX：０４９－２３６－４７１１
E-mail：npo-kinenkan@nifty.com
ＭＬ：npo-kinenkan@freeml.com
ＨＰ：http://npo-chuukiren.jimdo.com/
郵便振込口座名「NPO 中帰連平和記念館」
振込口座　：００１５０－６－３１５９１８
開館日：「水、土、日」（10:30 ～ 16:30）
（ご来館はなるべく事前にご連絡下さい）